

奇妙な元興寺のかえる石の歴史

極楽堂の北側にある小さな庭に、カエルのような形をした石がある。この石は、1957 年以來幸運の象徴として元興寺の境内に安置されているが、1500 年代後半に始まった意外な歴史を持っている。この石は、大阪の河川敷で発見された。当時、大阪城の城主だった豊臣秀吉(1537-1598)に献上され、秀吉はこの石をたいそう気に入ったという。秀吉はやがて亡くなり、息子の秀頼（1593-1615）は徳川家康（1542-1616）と権力を争うようになった。家康は 1614 年と 1615 年に大坂城を攻め、城と豊臣家を滅ぼした。

秀頼は秀吉の側室である母の淀殿に権力を握られていたが、淀殿は大阪城の防衛に参加し、息子と一緒に亡くなったとされている。淀殿の遺体は、大阪城の堀を隔てたカエル石の下に埋められたと言われている。淀殿の死後、突然お堀に身を投じる者が現れ、溺れた者は必然的に石の近くに流れ着くという噂が流れた。

こうした悲惨な出来事は 20 世紀に入っても続いた。1940 年、堀で溺れていたところを助けられた男性が、カエル石の上に座っていたところ、十二単を着た女性が現れ、扇子を持って堀の方に手招きされたと報告した。この話は地元の新聞にも取り上げられ、当時、大阪城（当時は航空自衛隊の司令部があった）のカエルを見ようと人々が集まってきた。訪問者が殺到することを避けるため、日本軍は石を城から移動させた。

1957 年、大阪城の南側にある法円坂で蛙岩は再発見された。発見者は元興寺住職の辻村泰円氏（1919-1978）と面識があった。岩は境内に移され、淀殿の怨霊を葬る法要が営まれた。それ以来、この蛙岩にまつわる怪奇現象は起こっていない。毎年 7 月 7 日には、大阪城の籠城戦で亡くなった餓鬼の供養のために特別な儀式が行われる。僧侶がお経を唱え、果物や野菜を供える。その後、塩と共に米、大豆、小豆と胡麻の穀物を入れた水を岩に注ぐ。